令和５年度小松市立松東みどり学園　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

・まわりの人を思いやり，協力してよりよい社会を創る子
・夢や志をもち，自ら考え，挑戦する子
・ふるさとに誇りをもち，発展に貢献する子

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	中間 児童生徒	中間 保護者	中間 ※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	年度末 児童生徒	年度末 保護者	年度末 ※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	自ら考え、挑戦する子の育成		①を100%	①	**学校生活が充実している。**	94.4 A:33.3 B:61.1	95.3 A:51.2 B:44.1	86.9 A:39.1 B:47.8		90.5 A:19.0 B:71.5	93.6 A:56.7 B:36.9	85.5 A:38.4 B:47.1		①～③の項目全てにおいて、調査対象3者とも肯定的評価の数値が減少した。教職員、児童生徒ともに、活動の意義や目指す姿の共有や行動の価値づけが十分でなく、到達点が不明確となったと思われる。 ①の児童生徒Ａの数値が上がっているが、Ｂ評価は大きく下がっている。児童生徒にとって、2学期の中心的な取組であった勧進帳が「一部の子の活躍の場」と捉えられた可能性や日常的なかかわりの不足が考えられる。	教員が、児童生徒会活動、各委員会活動で主体的な活動が実現されるように提案する。学級活動においては、めざす姿の共有を明確に示し、計画的に学級会や係活動などに取り組ませる。その中で、取組後だけでなく途中経過を見取り、価値づけを計画的・意図的に行う。
				②	**児童生徒活動や行事に主体的に協力し合っている。**	88.9 A:44.4 B:44.4	98.8 A:67.1 B:31.8			90.0 A:20.0 B:70.0	97.1 A:59.6 B:37.5				
				③	**自分の役割を果たし、学校・学級をよりよくするために考えて行動している。**	94.4 A:33.3 B:61.1	95.9 A:54.7 B:41.2			85.0 A:20.0 B:65.0	94.7 A:50.8 B:43.9				
				集計											

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		③を90%	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	66.7 A:27.8 B:38.9				71.4 A:28.5 B:42.9				①・②は肯定的評価が増加したが③は減少している。①より、各自では働き方や業務改善を意識している。一方、②・③より教職員にとって、組織としての取組にまではなっていないと考えられる。	各分掌部会等の時間を確保するため、教務と連携する。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	88.9 A:33.3 B:55.6				95.2 A:9.5 B:85.7					
				③	**働き方の改善を目指し、各部内での協力体制づくりに心がけている。**	88.9 A:11.1 B:77.8				76.2 A:9.5 B:66.7					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①②の平均が中間・・・85%以上 年度末・・・90%以上	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	82.4 A:29.4 B:52.9				89.5 A:36.8 B:52.7				①は，ふり返りの具体例について各教室掲示をしたり，授業づくりの取り組みをふり返りに焦点化したりしたことで，共通認識を持てたことにより数値が向上したと思われる。	取組を継続し，授業の始めやおたより，掲示物などで児童・生徒同士でも成長段階ごとに良い例に触れる機会を2月・3月に2回設ける。更に研究を進めるために先生方の声を聞き，その声をもとに研究推進委員会で今後の研究について提案し，先を見通した計画を立てる。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100.0 A:58.8 B:41.2				100.0 A:47.3 B:52.7					
				集計											
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	⑤の教員及び児童生徒の割合が 中間…85%以上 期末…90%以上	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	87.5 A:37.5 B:50.0	94.1 A:47.1 B:47.1			100.0 A:35.0 B:65.0	95.3 A:45.6 B:49.7			③はA＋B評価の数値としては教員も児童生徒も低くはない。しかし，教員のA評価を見ると15%と低いことが分かる。 ⑤は，全体の数値は低下したがA評価はわずかながら増加した。学校評価アンケートの記述より，2学期はふり返りの充実を意識するために，研究全体会での共通理解や学期途中での進捗状況の確認があったことで，他の先生方の実践を見る機会があったことが良かったのではないかと感じている。一方，ふり返りを行えていない時間や児童・生徒の記述の中身が浅い等，十分に取り組めていないという意見も見られた。 ⑥教員も児童生徒もA＋B評価が高い。	③異学年で授業を見合い，良いモデルを見ることで目指す姿が自覚できるようにする ⑤更に共通理解を高めるために，教員が授業づくりについての悩みや，重点項目の取組状況について教科部会を設定し，進捗状況を共有できる機会を増やす。その中であがってきた課題について研究全体会を計画することで，先生方のニーズに沿った研究が進められるようにしていく。 ⑥GIGA担当と連携し有効な活用方法を共有する。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	94.1 A:64.7 B:29.4	95.9 A:52.9 B:42.9			94.7 A:31.5 B:63.2	95.3 A:52.0 B:43.3				
				③	**児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。**	88.2 A:23.5 B:64.7	90.0 A:37.6 B:52.4			85.0 A:15.0 B:70.0	90.1 A:39.1 B:51.0				
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	94.1 A:23.5 B:70.6	95.3 A:55.3 B:40.0			85.0 A:15.0 B:70.0	95.9 A:49.1 B:46.8				
				⑤	**児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。**	82.4 A:35.3 B:47.1	92.9 A:51.8 B:41.2			78.9 A:36.8 B:42.1	89.5 A:52.0 B:37.5				
				⑥	**児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。**	94.1 A:64.7 B:29.4	95.9 A:72.9 B:22.9			89.5 A:57.8 B:31.7	95.3 A:57.8 B:71.9				
				集計											
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③④⑤⑥共に100%にする。	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	94.1 A:47.1 B:47.1				89.5 A:31.5 B:58.0				・①肯定的評価が５ポイント下がったが、年度当初に立てたカリキュラム・マネジメント計画に沿った実践は継続している。 ・②③の肯定的評価が５ポイント下がった。計画に沿って実施しているはずであるが、実感しにくい職員もいたと考える。 ・⑤と⑥は全体の肯定的評価が下がったが、前期課程ではＡ評価が伸びた。担任の取り組み方に深まりがあったと考える。	②について ・今年度の実施より、後期課程のみら探の学習内容について改善する方向である。今後もPDCAサイクルで、みらい探究科を中心に学期ごとに教育課程の改善及びブラッシュアップを行っていく。 ③について ・担任や教科担当の学力向上への取り組み方について、教務主任が定期的に様子を聞くことにより、取組への温度差を縮めたり、児童生徒の実態にあった取り組み方を相談・提案したりしていく。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	94.4 A:22.2 B:72.2				89.5 A:21.0 B:68.5					
				③	**全職員に「実施状況の検証」及び「成果の検証」の方法や内容、時期について周知し、計画的に検証を実行している。**	100.0 A:72.2 B:27.8				94.7 A:68.4 B:26.3					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	100.0 A:72.2 B:27.8				100.0 A:60.0 B:40.0					
				⑤	**主要教科で記述問題に取り組み、読解力の向上に努める。（前期課程）**	100.0 A:58.3 B:41.7				90.0 A:70.0 B:20.0					
				⑥	**定期テストの記述問題の結果を分析し、授業の改善を行う。（後期課程）**	100.0 A:50.0 B:50.0				90.0 A:40.0 B:50.0					
				集計											
		家庭学習	①教員100%，3～9年生「計画を立てて勉強している」90%以上にする。 ②教員100%，児童生徒「家庭学習で学習用端末を活用する」90%以上にする。 ③児童生徒90%以上にする。（質問内容は学年に応じる）	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	94.1 A:47.1 B:47.1	78.0 A:51.8 B:26.2	66.9 A:16.2 B:50.7		83.3 A:50.0 B:33.3	79.2 A:42.1 B:37.1	65.9 A:15.9 B:50.0		・①児童生徒　２学期も目標の90%には届かなかったが、79.2%［前期課程88%（75/85人），後期課程65%（36/55人）］と微増した。継続的に、計画に沿って家庭学習に取り組んでいることが伺える。しかし、保護者の肯定的評価が依然と低いままである。 ・②教員は約95%と大幅に伸びたが、児童生徒は約６ポイント下がった。 ・③児童生徒　肯定的評価が6ポイント下がったが、Ａ評価は50ポイントを維持した。多くの子が成果を実感できる学習をしていると考える。	①と③について ・後期課程では、計画を立てることが苦手だったり、計画通りに実行する力が弱かったりする生徒が一定数いる。３学期の定期テスト前に、担任や後期教務が弱点を克服するための計画の立て方を具体的に指導し、計画に沿って学習が進んでいるのかを確認していく。 ・担任や教務は、宿題等の家庭学習を確実に行うことを改めて呼びかける。また、自主学習ノートの成果を交流する機会を学年の実態に応じて行う。（例：自学ノートの掲示，スライドや学級通信での紹介）
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	82.4 A:41.2 B:41.2	85.3 A:52.9 B:32.4			94.7 A:36.8 B:57.9	79.5 A:49.1 B:30.4				
				③	**成果を実感できる家庭学習に取り組んでいる。**	94.1 A:23.5 B:70.6	90.9 A:55.2 B:35.7			84.2 A:21.0 B:63.2	84.8 A:50.8 B:34.0				
				集計											

令和５年度小松市立松東みどり学園　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	自己指導能力の育成 ・児童生徒会目標実現に向け、児童生徒会を中心に各委員会が役割(常時活動・独自企画の運営)を果たせるようにする。その際、児童生徒主体の活動となるよう指導や援助を行う。 ・児童生徒の現状把握と情報共有のミーティングを、職員会議から２週間後の週に、低学年・高学年・後期課程それぞれで、生徒指導担当を中心に行う。 ・児童生徒の社会的自立を目指して、不登校児童生徒やその傾向がある児童生徒に対し、校内の受け入れ体制を整えつつ、保護者や外部機関との連携も進めていく。	・委員会ごとの仕事内容をきちんと住み分けして提示することができなかった。２学期以降は仕事内容を明確にしたうえで、児童生徒が選択・決定して実行できるように、職員の事前の打ち合わせを密にしていく。 ・職員会議ごとに児童生徒理解の時間を確保し、共通理解を図っている。また、職員間での日常的な報告連絡相談で、前期課程と後期課程の間でスムーズで密な情報交換を行っている。全職員に共有したい案件は、封筒に入れて回覧して今後の対応に生かせた。２週間に１回の情報共有のミーティングはまだまだ定着していないので、引き続き声かけをして取り組んでいく必要がある。 ・不登校傾向の児童生徒には、時間外の登校や別室登校など柔軟な対応を実施しており、登校が難しい場合についても保護者との連絡を密に行った。人間関係で悩みを抱える子どもが複数おり、懇談や話し合いを行って丁寧に対応した。 ・SCや外部機関との連携を図り、児童生徒の心のケアにつなげていく。	・１学期の課題であった仕事の住み分けがしっかりできた。また、各委員会の教師と児童生徒の打ち合わせやリハーサルの時間を十分に確保したことで、目的意識を持って児童生徒が動くことができた。今後も教師間での確認を進めていく。 ・職員会議ごとに児童生徒理解の時間を確保し、共通理解を図ってきた。また、２週間に１回の情報共有のミーティングも実施し、その内容を記録したことで、後日回覧で職員全体に共有することもできた。 ・不登校傾向の児童生徒に対して柔軟な対応を実施することができた。一人ひとりの特性を理解し、別室登校や個別学習の場の設定など教諭間での情報共有を密にすることができた。 ・SCや外部機関と連携を図ることができ、児童生徒の心のケアに繋げることができた。
特別支援教育	児童生徒理解を深め，特別支援教育の充実を図る ・三つの部会（低学年・高学年・後期課程）ごとに，特別教育支援員の記録や日常の見取りから気になる児童生徒の実態把握を図る。 ・毎月の児童生徒理解の会において，それぞれの部会で挙げられた児童生徒の情報共有を図り，組織的な対応を行う。 ・必要に応じてケース会議を行い，児童生徒の困りごとなどに素早く対応できるようにする。 ・特別支援教育校内委員会を学期に１回行い，要支援児童生徒に対する支援の方針や体制を協議し見直しを図る。 ・関係諸機関との連携を密にし，より有効な支援のあり方を追求する。	・担任が直接児童生徒の様子を記入できるようにしたため，気になる児童生徒の実態を明確に把握することができた。 ・毎月の職員会議ごとに児童理解の会において，情報共有を図ることができた。教務と相談し，事前に時間の確保を行い，情報共有が確実にできるようになった。 ・気になる児童生徒についてケース会議を行い，今後の対応について，専門相談員や医療機関の担当医師と相談することで支援の方法を検討することができた。 ・特別支援教育校内委員会では，要支援児童生徒の対象者について，気づき票や担当教員による授業の様子などの見取りをもとに，支援の方針や体制を確認することができた。	・児童理解の会では、説明の必要な児童生徒について色付けし、絞って行うことで、より詳細な情報を共有することができた。また、その他の児童生徒についても毎月の職員会議で周知することで、担任以外の先生方もその児童生徒について様子を気にかけてもらえることができた。 ・特別な支援が必要な児童生徒に対して、学校としてどのようなサポートができるのかなどを気軽に相談できるよう、関係機関とも今後も連携を図っていく。
道徳教育	深い学びにつながる授業づくり ・中心発問や切り返し発問などの吟味を通して、学びを深められる授業実践を積み重ねていくために、ペア学年ごとの教材研究の場を学期に一回以上設定する。 ・年間に各学級1回以上ゲストティーチャーの活用をする。 ・掲示計画を立て、道徳掲示板を活用し各学年の実践を広める。	・１学期はペア学年ごとの教材研究の場を設定することができなかった。別葉のふり返りから、価値項目に迫る発問を考えることが難しいという意見を受け、2学期には教材研究の場を設定し、指導に生かしていくことができるようにする。 ・年度初めに各学年担任に呼びかけ、ゲストティーチャーの活用計画を立てることができた。2学期に実施する学年が多いためこれから事前準備を行い取り組んでいく。 ・道徳の価値項目を意識しながら学校行事と結びつけて掲示することができた。2学期は道徳の授業のふりかえりと勧進帳公演に向けて児童生徒の活動を価値づける掲示をしていく。	・1学期に実施できなかった道徳教材研究会を2学期初めに行うことができた。学担のみではなく、級外の先生も参加することで、中心発問をより深く考えたり児童生徒の反応をより広く捉えたりすることができた。3学期は1月に教材研究会を企画実施していく。 ・ゲストティーチャーを招聘しての授業を予定通り進めているが、視野を広げて深い学びになるよう、校外の地域人材を招いての授業をさらに充実させていくことについては今後の課題である。 ・重点項目について、児童生徒による関連行事のふり返りや、学担による道徳別葉のふり返りからも学びや成長を感じ取ることができた。
保健健康教育	健康の促進・体力の向上 ・体育の授業で本校の体力課題に対応した運動メニューを担当が提案し実施する。 ・体力・運動能力調査に年間を通じて取り組み、その成果を定期的に確認し改善を図る。 ・委員会活動など児童生徒会が主体的に考えた企画を通して、児童生徒のよりよい生活習慣を目指す。 ・専門の先生を招聘し，指導法についての理解等を深めるとともに，運動の楽しさを感じられる授業の実現を図る。	・1学期の調査結果を受け、本校の体力課題である持久力、柔軟性向上のためのメニューを提案し2学期から実施する。体を支持する運動の活動前には、体育担当から体育授業者に指導法の確認を行い、けが防止に努める。 ・1学期には、熱中症予防のためのこまめな水分補給や好き嫌いなく食べる工夫を委員会活動を通して呼びかけることができた。今後も歯を守る意識付けやストレスマネジメントなど、学校保健委員会などの発信の場を生かしながら児童生徒の生活改善に役立つようにしていく。 ・今年度は、Ks体操クラブやダンス講師など専門の先生を招聘し活動できるように計画をしている。	・1学期に体力課題として挙げられた持久力、柔軟性向上のためのメニューについて、2学期は学校全体で取り組むことができなかったため、1月より実施する。２月にシャトルラン、長座体前屈等の記録をとり、来年度以降の体力向上のための取り組みにつなげる。 ・給食保健委員会では、心と体の健康をテーマに，12月に心のつながりを意識した縦割り運動遊びを行った。1月～2月に給食の好き嫌いを減らす取り組みを企画運営し，児童生徒のより良い生活習慣につなげていく。 ・器械運動を苦手としている児童が、スモールステップでの場の設定を大切にした授業に参加することで、どの子も運動の楽しさを感じながら挑む姿が見られた。1月にはダンス講師によるリズム運動の授業を実施し、表現運動の楽しさを味わうことができるようにする。
特色づくり	９年間の学びの中で持続可能な社会を担う人材に必要な資質・能力を育成する。 ①キャリア教育 ・児童生徒自身が目標に向かい計画、実行、評価、改善を行う。 ・自らのキャリアを考えるために、職業や上級学校に関する学習を行う。 ②みらい探究科 ・コミュニケーションタイムの学習を基盤としたプロジェクトタイムの学習を行う。 ・ステージⅡ以上の学年では、英語による表現の場を設ける。 ③英語教育 ・生きた英語力の向上を図るために、年間を通じて自己表現する学習を行う。 ・前期課程からの英語検定の受検を奨励していく。	①キャリア教育 ・立てた目標に対して児童生徒自身が達成できたことやそれまでの過程について自己評価することができている。１学期の取り組みをふまえ，２学期に改善していけるようコメントなどを通じて児童生徒に適切にアドバイスするようにしていく。 ・８年の校外学習では企業訪問を行い，見学及び講話を聞くことができた。今後８，９年生では「ようこそ先輩」としてOB・OGの高校生から実際の高校生活の様子について知る機会を設ける。また職業人による講話も継続的に行っていく。 ②みらい探究科 ・各学年とも情報スキルを活かしてプロジェクトタイムの学習を進めている。コミュニケーションスキルや英語の発表については，２学期以降に計画されているものが多い。計画通り実施できるよう校内外に協力を求めていく。 ③英語教育 ・前期課程の外国語科，後期課程の英語科のそれぞれの学習で，単元末に発信型の学習を設定し，単元で学習したことを活用して発表する場面を設定した。英語検定は，次回の10月の検定に向け，積極的な受検を奨励するために，児童・生徒のみではなく保護者にも周知していく。	①キャリア教育 ・発達の段階に応じて、児童生徒が積極的に目標達成に向けて取り組み、その過程について自己評価することができている。年度末には、キャリアパスポートのコメントを通じて、児童生徒が１年の成長を実感できるようにしていく。 ・企業講話は良い機会であるが「生き方を深めるレベル」までは到達しない。それと比較して企業体験は、「自分の生き方であり、社会人としての在り方」までの深まりが見られた。 ②みらい探究科 ・各学年とも習得した情報スキルを活かしたり、校外の専門的な方々と協力しながらプロジェクトタイムの学習を進めることができた。英語での発表については本校在籍のALTに向けて3学期に発表する場を設ける。尚、内容については市と連携して検討・改善していく。 ③英語教育 ・各学年で学習した言葉や表現方法を使って，自分自身のことや身近なものについて表現する活動を確保することができた。 ・英語検定は前期課程でも5級・4級の合格者，後期課程でも2級合格者を出すことができた。継続的に受検をし合格する児童・生徒もおり，継続した受検を奨励していく。

学校関係者評価	・「本年度の重点目標」を達成しようとする一連の取り組みは評価できる。 ・本会(第２回学校運営委員会）では今年度の取組報告と検証に終わらず、来年度の校長の運営方針が示された。法令に準拠した運営であり、有意義である。スクールガイドにも「本年の重点目標」として記載できないか検討してほしい。 ・働き方改革に関わる「80時間」の設定は努力目標的運用になっているが、達成目標としてぜひ「80時間」超過者を無くしてほしい。人員配置等で改善が必要な点は、学校からも行政に意見を伝えていくべきである。 ・行事、学習等で児童生徒の活動に対し、成果主義に陥らず、努力の過程を評価することを忘れず運営を行って欲しい。 ・本校の特徴は「異年齢間の交流」である。人間形成におけるその特徴の効果・利点を今後検証していくと良い。